

- 志太榛原地域のイチゴ産地は、高齢化、後継者不足により栽培面積及び農家戸数は減少している。産地を維持するためには、新規参入者の育成及び省力化技術の導入を図る必要がある。
- このため志太榛原農林事務所は、**スマート農業の導入**による環境管理の自動化を推進するほか**新規参入者向けのイチゴ基礎講座**を開催している。
- その結果、5年前に比べ、栽培面積は99%、11.3haと産地規模は維持され、**販売額は119%、7億円**と増加した。

具体的な成果

普及指導員の活動

1 スマート農業の普及推進

■県単事業を活用して**複合環境制御装置の導入**を推進した結果、7戸で環境管理の自動化が図られた(H30→R2)。

- ①導入戸数
0戸 → 7戸
- ②導入面積
0a → 129a



2 イチゴ新規参入者の経営安定

■複合作物として**中古ハウスを活用した新規参入**(H30→R2)。

- ①戸数
0戸 → 5戸
- ②面積
0a → 90a



■イチゴ基礎講座受講生(R2→R3)

- ①戸数
10戸 → 14戸
- ②生産者数
延べ113名(R2)



3 早期定植による省力化

■7月上旬、イチゴ苗を本ぽ高設ベッドに早期定植することにより、かん水管理を自動化した(H30→R3)。

- ①戸数 1戸 → 3戸
- ②面積 138a → 240a

平成30年～継続

- 環境モニタリング機器を6戸に試験導入し、**環境要因と収量の分析を実施(国補助事業を活用)**。
- 高生産栽培技術マニュアルの作成・配布。
- 環境制御全体研修会を毎年2回実施。

令和元年～継続

- 所主催の経営戦略講座にて経営発展計画の作成支援。
- 専門家派遣事業を活用し、法人化に向けた課題整理及び計画作成を支援。

令和2年～継続

- 新規参入者を対象に、イチゴ基礎講座を毎月実施**。
- イチゴの生理生態、病害虫防除、栽培管理について講義を実施。
- 複合環境制御装置を導入した新規参入2戸が、新品種‘きらび香’の7月上旬早期定植の省力実証ほ場を設置した。

普及指導員だからできたこと

■JAと連携し、現地ほ場の環境データをスマホを利用し蓄積した。収量の多い生産者のデータを収量の少ない生産者や新規参入者の指導に活用した。

■農林技術研究所で開発された技術を、JA、先進農家と連携し、現地モデルほ場で、改良を加えながら定着させることができた。

静岡県

新規参入者の育成と先端技術導入によるイチゴ産地の生産力強化

活動期間：平成 30 年度～（継続中）

1. 取組の背景

静岡県志太榛原地域は温暖な気象と日照時間に恵まれたイチゴ産地である。生産者の高齢化、担い手不足により栽培面積が減少する中、農外からの研修生を受け入れる、県の「がんばる新農業人支援事業」により新規就農者が毎年2～3人定着している。また、複合作物として新たにイチゴ栽培に参入する者が増えている。

産地を維持するためには、省力化技術の導入とイチゴ新規就農及び参入者の経営安定が必要である。そのため、スマート農業の導入による栽培管理の自動化を推進したほか、栽培管理技術習得のための基礎講座を開催している。

表1 管内イチゴの生産状況（大井川農協、ハイン農協）

年度	農家戸数（戸）			栽培面積（h a）	販売金額（億円）	1 戸当り販売金額（万円）
	うち新規就農	うち新規参入				
平成 28 年	6 8	2	0	1 1. 4	5. 9	8 6 8
平成 29 年	7 0	2	0	1 1. 6	6. 6	9 4 3
平成 30 年	6 9	3	1	1 1. 5	6. 7	9 7 1
令和 元年	6 3	3	2	1 0. 7	6. 2	9 8 4
令和 2 年	6 5	3	2	1 1. 3	7. 0	1, 0 7 7

2. 活動内容（詳細）

（1）スマート農業の普及推進

国庫補助事業を活用して環境モニタリング機器を6戸の現地ハウスに設置し、環境要因と収量の関係を分析した。なお、最も収量が多い生産者は10 a 当り8 tを収穫していた（次世代施設園芸技術習得支援事業）。

この現地事例を基に、高生産栽培技術マニュアルを作成し、当農林事務所主催の環境制御研究会で配布・活用した。

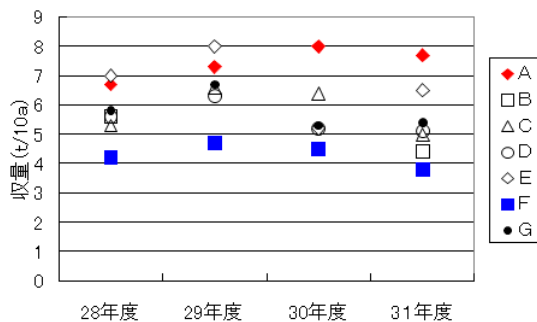


図1 収量の推移



図2 環境制御全体研修会

(2) 新規就農者、新規参入者向けイチゴ基礎講座の開催

イチゴの生理生態、病害虫防除、栽培管理について基礎知識を習得するためイチゴ基礎講座を月1回実施している。

また、新規参入者には採苗から収穫パック詰めまでの年間経営計画の作成を個別に支援した。



図3 基礎講座の様子



図4 個別指導の様子

(3) 早期定植による省力化

切り離した子苗を育苗ほの代わりに、7月上旬から本ほ高設ベッドに定植し本ほ給液装置を育苗用に流用することで、頭上灌水による炭疽病発生を防止するとともに、灌水管理の省力化を図った。



図5 早期定植の様子

3. 具体的な成果(詳細)

(1) スマート農業の普及推進

温度管理の自動化による省力化及び収量UPを図るため、県単の次世代施設園芸デジタル化支援事業を活用し、昨年度までに複合環境制御装置を7戸、面積129aに導入し、本年度は更に5戸の導入が決定している。

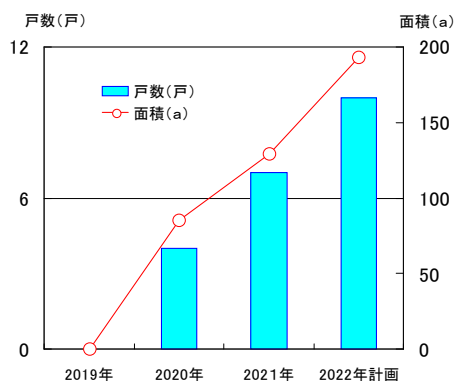


図6 複合環境制御装置の導入状況

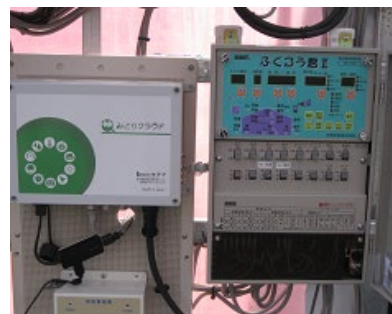


図7 複合環境制御装置

(2) イチゴ新規参入者の経営安定

R3年度は、イチゴで2戸(26a)が新規参入した。イチゴ基礎講座は14経営体が受講している。

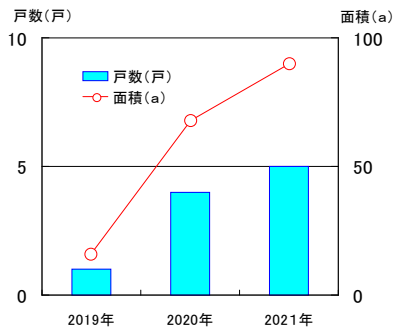


図8 新規参入状況

表2 基礎講座の受講状況

	R 2年	R 3年
農家戸数	10	14
延べ参加人数	113	52※

※R 3年の参加人数は7月現在

(3) 早期定植による省力化

R 3年度は3戸、240 a で7月上旬から本ぽ高設ベッドを利用した早期定植に取り組み、灌水管理の省力化と大規模経営体の定植作業の分散化を図った。

	月	6			7			8			9			10			11			12～5			
	旬	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	
慣行栽培					苗切離し	かん水管理			定植														収穫
早期定植					定植																		収穫

図9 イチゴ‘きらび香’の早期定植の作業体系

4. 農家等からの評価・コメント

イチゴを初めて栽培したが、複合環境制御装置を導入し温度管理を自動化することにより、適温管理が可能となった。手動管理では、とても対応できないと思う。また、スマホで遠隔操作が可能のため便利である（農家A）。

新規参入のため、イチゴ栽培については素人で、分からない事ばかりだった。講座に参加してイチゴの基礎を学習でき、とても参考になった（農家B）。

5. 普及指導員のコメント（志太榛原農林事務所生産振興課産地育成班長 藤浪裕幸）

ハウス内環境をモニタリングし、収量の多い生産者と少ない生産者の環境データを比較することで、10月下旬以降の適温管理が収量確保に重要であることが判明した。また、安定生産には、良い苗作りや病虫害の予防防除が重要であり、今後の講座等を通じて徹底していきたい。

6. 現状・今後の展開等

イチゴは他の品目に比べ、単価が安定し、10 a 当り売上げ 800 万円程度の経営モデルが成り立つため、今後も新規参入及び新規就農希望者の増加が見込まれる。経営を開始する1年前の学習機会として、イチゴ基礎講座をJAや市町と連携し新規就農希望者に周知する。

また、就農後のフォローアップ講座も開設し、就農計画の目標達成を継続的に支援していく。